報告

浸潤性膀胱扁平上皮がんに対して根治手術単独治療を行った8症例についての検討

水沢弘哉　道面尚久　小泉孔二　小口智彦　菊池俊樹

IRYO Vol. 63 No. 6 (375－379) 2009

要旨 浸潤性膀胱扁平上皮がんの臨床像を明らかにする目的で，浸潤性膀胱がんの診断にて膀胱全摘除術を施行し病理学的に扁平上皮がん（尿路上皮がんを混在しない）と診断された8例に対して遡及的に検討を行った．性別は男性3例，女性5例．年齢は57歳から85歳．観察期間は34カ月から117カ月であった．摘出標本の病理診断で，深達度は全例でpT_3（膀胱周囲脂肪織に達する）以上であった．リンパ節転移は4例で認められた．遠隔転移を有する症例はなく，術前後に補助療法を施行した症例はなかった．8例中1例で術後14カ月の時点で肺転移が出現し，化学療法を行った．転帰はがん死4例，生存3例，他因死1例であった．自験例を含めて本邦での根治手術単独治療の症例を集計すると，25例中（10例のstageⅣを含む）生存は12例（48%）であった．膀胱扁平上皮がんは診断時に浸潤がんとなっていることが多く，また予後も不良であるため補助療法として放射線照射や化学療法を施行する症例が多いと思われるが，比較的まれな疾患でありその意義は確立されてはいない．今回，少数例での検討ではあるが，膀胱全摘除術単独治療と比較し補助療法の有効性を見出すことはできなかった．摘出可能な症例には膀胱全摘除術を施行し，明らかな残存腫瘍がなければ根治手術後に補助療法を行わずに観察する方針が妥当であり，根治術不能な症例または再発症例に対して化学療法併用放射線照射を検討すべきと思われた．

キーワード　浸潤性膀胱がん，扁平上皮がん，補助療法，膀胱全摘除術

はじめに

膀胱がんの中で扁平上皮がんは比較的まれな疾患で，膀胱腫瘍の5%以下と報告されている[1)2)]．そして，その多くは診断時に浸潤がんとなっており予後不良で，臨床的にはきわめて重要である[2)-4)]．膀胱全摘除術が標準的治療と位置づけられているが，病期の進行した症例が多いためさまざまな補助療法が行われている．近年，根治手術の補助療法として放射線療法や化学療法が有効であるとの報告がみられるが，症例が限られていることに加え，補助療法も多岐にわたり結論は出ていない．また，根治手術単独で治療を行った症例についての集計はほとんどされていない．

われわれは，浸潤性膀胱扁平上皮がんに対して根治的手術を行った自験例を臨床的に検討するとともに，主に補助療法の観点から文献的に考察を行ったので報告する．

国立病院機構長野病院　泌尿器科
別刷請求先：水沢弘哉　国立病院機構長野病院　泌尿器科　〒386-8610　長野県上田市緑が丘1-27-21
（平成20年12月20日受付，平成21年4月10日受理）
Clinical Analysis of Pure Squamous Cell Carcinoma of the Urinary Bladder
Hiroya Mizusawa, Takahisa Domen, Koji Koizumi, Tomohiko Oguchi and Toshiki Kikuchi, NHO Nagano Hospital
Key Words: invasive bladder tumor, squamous cell carcinoma, adjuvant therapy, radical cystectomy